

生物多様性の視点から見た 自然の現状 （野鳥たちの異変から学ぶこと）



大橋 弘一 (おおはし こういち)

野鳥写真家

1954年東京都生まれ。札幌市在住。日本の野鳥をテーマに撮り続け図鑑・専門誌・カレンダー等に作品を多数発表。新聞・雑誌連載などのほかテレビ・ラジオ出演、執筆など多彩な活動を通して生態系保全を訴えている。『庭で楽しむ野鳥の本』『散歩で楽しむ野鳥の本』（以上、山と溪谷社）『北海道野鳥ハンディガイド』『北海道野鳥観察地ガイド』（以上、北海道新聞社）『鳥の名前』（東京書籍）など著書多数。（公財）日本野鳥の会・日本自然科学写真協会各会員。早稲田大学法学部卒業。北海道自然雑誌faura編集長。

脅かされる生物多様性

自然環境を語るために必要な言葉として「生物多様性」という語がすっかり市民権を得たようである。生物多様性は「種」「生態系」「遺伝子」の各レベルで多様性が必要だという概念であり、生物種が多ければいいという単純な話ではない。むしろ、生命の進化の歴史や生きもの同士の相互関係を理解するためのキーワードと言った方が適切かもしれない。

生物多様性を語る際によく「現代は地球誕生以来最悪のペースで野生生物が絶滅している時代」と言われる。その原因の多くは産業革命以降の人間活動の急発展に起因し、こうした事態を憂慮した生物学者たちによって1980年代から生物多様性という言葉が使われるようになった。生物多様性の保全には、人為的要因で野生生物を絶滅させてはならないという価値観が根底にあり、そのための道筋として自然を自然のまま保全しようとするものである。

こうした視点をもって日本の様子を見てみると、例えば北海道でも少し郊外へ出かければハリエンジュ（ニセアカシア）やオオハンゴンソウなど外来植物の繁茂に驚かされることに思い当たる。外来種つまり本来その場所に自然分布していない生きものは、生物多様性を損なわせる大きな要因のひとつである。また、ホッケやサケの記録的不漁、カワウソの絶滅、急増したエゾシカによる農林業被害など、最近報道された例だけでも直接間接に生物多様性の劣化を示す事象に事欠かない。ヒグマの人の生活圏への頻繁な出没もその疑いが濃厚だ。暖海性の魚がたくさん捕れ、熱帯の毒グモはもはや日本列島に定着してしまっている。

北海道の野鳥に見られる変化

生物多様性の劣化は鳥たちにも無縁ではない。私が野鳥写真家として活動し始めてから20数年が過ぎたが、この年月は自然の営みの中ではほんの一瞬のようになわづかな時間である。それにもかかわらず、この間に北海道の野鳥の生息状況には大きな変化を感じている。例えば20年前には見る機会の少なかったダイサギ

が今は全く珍しくなくなった。カワウやメジロ、オオヨシキリなども明らかに増えている。

このように増加する鳥がいる半面、全体的には個体数の減少傾向が強い。ヨタカやアオバズクといった森林性の夏鳥は全国的にも大きく減少していると言われるが、北海道ではそれに加えてアカモズやウズラなど草原性の夏鳥も目に見えて減った。さらにアトリなど冬鳥の渡来数も減っているように感じられる。

興味深いのは、北海道を繁殖分布の中心とするコムクドリの動向だ。繁殖の時期がこの30年間で約15日も早まっているという報告があり（新潟県での調査事例）、これは雛ひなに与えるサクラなどの実の成熟期が温暖化によって早まってきていることへの適応と考えられる。地球温暖化も生物多様性を劣化させる大きな要因のひとつである。

渡り鳥シマアオジの場合

野鳥保護の中で、渡り鳥の場合は国内だけで対策が完結できないケースが多いのが特徴だ。渡り鳥とは繁殖地と越冬地を定期的に行き来する鳥を指し、繁殖地も越冬地も、そしてその両地点を結ぶ経路地も、すべての環境が健全でなければその鳥は生き続けられない。渡りルートが国境を越えることも珍しくなく、1種類の鳥を守るためにいくつもの国の連携が必要になる。タンチョウやシマフクロウのような留鳥よりもさらに難易度の高い保護策を必要とするのが渡り鳥であり、国際連携という難題のために対策が手遅れになりがちなのが現実である。その顕著な例がシマアオジだ。

シマアオジは日本では北海道だけで繁殖するホオジロ科の鳥で、可憐な姿と哀愁を帯びた美声が特徴。かつては生息地の草原へ行けばごく普通に見ることができた。いわば北海道の原野を象徴する存在であった。

しかし、1990年代前半から急に減り始め2006年に環

境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠA類（絶滅の可能性が最も高いランク）に指定されたが、既に遅く、その時には現実的には全く一般の目に触れないほどに激減していた。今、北海道全域でも数十羽しか生息していないと推定され、まさに種としての存続が危ぶまれる状態に陥っている。トキやコウノトリが国内絶滅に向かった時よりも急激な減少ぶりに絶滅危惧指定が間に合わなかった感がある。レッドリスト指定そのものには法的効力はないが、もう少し早ければ何か対策を講じようという世論喚起のきっかけになったかもしれない。

シマアオジから学ぶ

シマアオジ急減の理由は、繁殖地・北海道の環境悪化よりも越冬地と経路地の問題が大きいと考えられている。越冬地のベトナムやミャンマーの正確な情報はなかなか伝わってこないが、シマアオジの棲む草原環境は開発行為によって失われやすく、東南アジア各国の経済発展が影響している可能性は大きい。

また、経路地・中国の広東省などでこの鳥を食べる食文化があったことも見逃せない。古来からの秋の味覚だったというが、経済発展とともにイベント化・商業化して大量捕獲されたことがシマアオジを減らす要因になったと思われる。1990年代には毎年数万人がこの鳥を食べる祭りが開かれていたという。今では中国当局がシマアオジ捕獲を禁じているが、容易に個体数を回復できないほどのダメージだったのだろう。

生物多様性を保全する目的は、我々人類が自然からの恵みを継続的に受けることにある。生物多様性の考え方が本当に根付いた時、北海道の片隅から1種類の小鳥がいなくなることさえも巡り巡って私たちの生活に影響することが広く理解されるようになるだろう。

大橋弘一写真事務所「ナチュラリー」

<http://www.naturally.co.jp/faura-shop-plus/>



雛にエゾヤマザクラの実を与えるコムクドリ。雛が小さいうちは昆虫ばかり与えるが、巣立ちが近づくと果実も多く与える。



さえざる雄のシマアオジ。1990年代に苫小牧の勇弘原野で撮影した写真。今では北海道のどこを探しても滅多に見られない。